

リンゴ主要品種の花芽分化期

長内 敬明

(青森県りんご試験場)

Time of Flower Bud Initiation of the Main Apple Varieties

Yoshiaki OSANAI

(Aomori Apple Experiment Station)

1 はじめに

リンゴ‘ふじ’の花芽分化期については、既に報告されているが¹⁾、その他の主要品種については明らかでない。品種ごとの花芽分化期を明らかにすることは、隔年結果防止のための摘果、支柱入れ、徒長枝の除去等指導上重要である。そこで、今回は‘王林’、‘つがる’、‘陸奥’、‘ジョナゴールド’の花芽分化期について検討した。

2 試験方法

当場内に栽植されている21年生‘王林’、‘つがる’、18

年生‘陸奥’、‘ジョナゴールド’、25年生‘ふじ’を使用した。材料は1991年の6月24日から8月16日まで約10日ごとに1年枝上の芽(副芽を除く短果枝)を10芽ずつとり、脱気後FAAにて固定して、適宜取り出して水洗い後に凍結マイクロトームで芽の縦断切片を作製した。切片はメチルグリーンで染色後、芽の内部の生長点部分の隆起量を150倍で検鏡し、測定した。測定方法は既報¹⁾に準じて生長点の隆起量がある一定値(図1のように維管束間の幅が0.4mmの線から生長点までの高さHが0.15mm)以上になった時を分化初期とし、そのものの割合が全体の50%を超えた時期を分化最盛期とみなして²⁾、これを分化期とした。さらに図2に8月6日時点での花芽の形態別の個数を示した。花芽の形態は、I未分化、II分化初期、III隆起期、IV初生突起期、V側分化期、VIがく形成期、VII花弁形成期、VIII雄ずい形成期IX雌ずい形成期の9のパターンで分類した。

3 試験結果及び考察

生長点の隆起量を6月24日から8月16日まで約10日ごとに図2に示した。これをみると、7月15日の段階で‘王林’と‘陸奥’が0.15mmを越え、7月24日には全品種ともに分化の目安となる0.15mmを超えた。図3には8月6日における花芽の形態とその個数を示した。これをみると、形態的に最も進んでいる品種は‘王林’で、その形態は花弁形成期であった。‘陸奥’はそれに次ぎ、がく形成期、‘つがる’が側花分化期、‘ジョナゴールド’が初生突起期、‘ふじ’は最も遅れて隆起期であった。

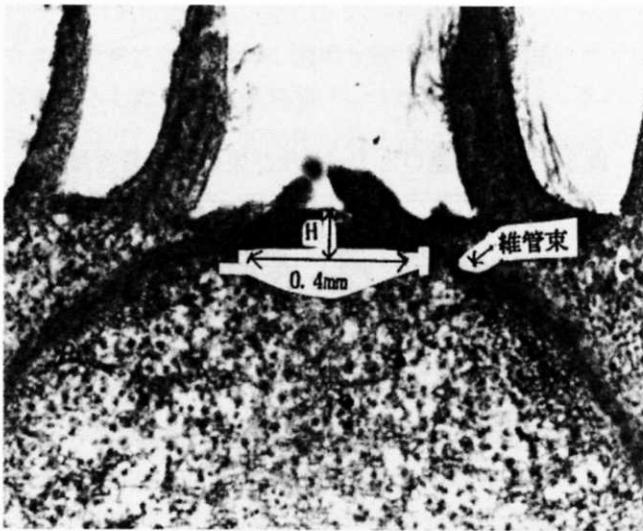


図1 隆起量の測定方法

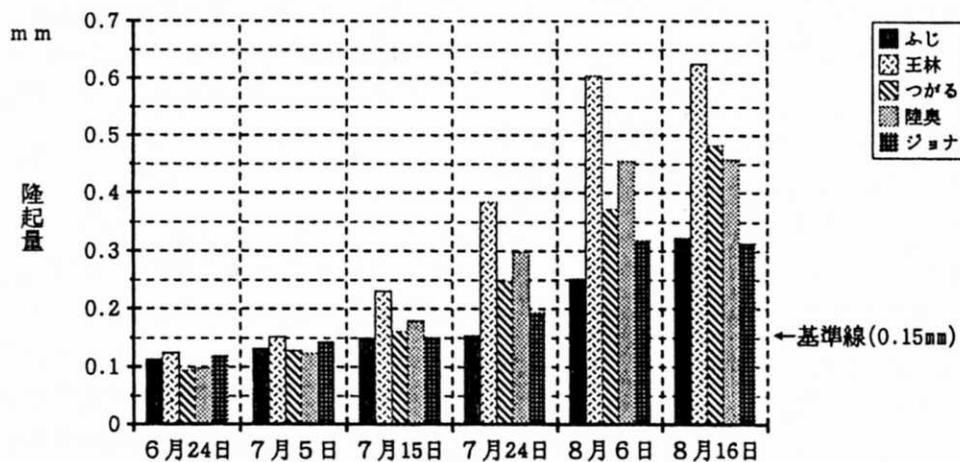


図2 成長点の隆起量

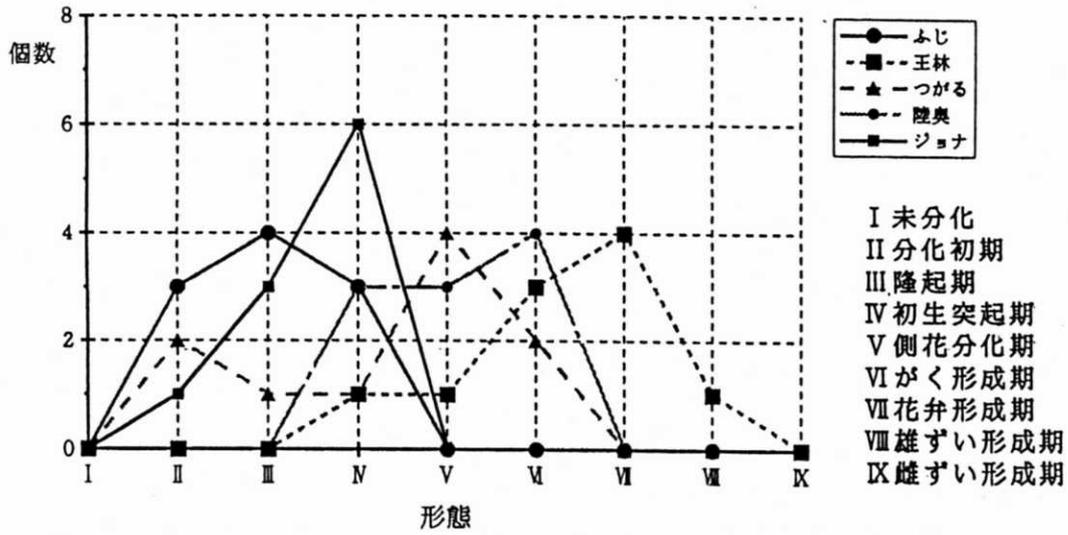


図3 8月6日における花芽の形態

4 ま と め

8月6日と8月16日の隆起量の多少及び花芽の形態から、最も分化期の早い品種は‘王林’で7月上旬頃、次いで‘陸奥’と‘つがる’がほぼ同様に7月上中旬頃、‘ジョナゴールド’と‘ふじ’がほぼ同様に7月中下旬頃に分化すると思われた。

引 用 文 献

- 1) 長内敬明, 岡本道夫, 小原信実. 1990. リンゴ‘ふじ’の花芽分化期と花芽分化期と花芽分化に及ぼす光と温度の影響. 青森りんご試報 26: 159-170.
- 2) 後澤憲志, 福島住雄. 1950. リンゴ主要品種の花芽分化について. 園学雑 19: 125-133.